



パピルス & エレクトロニクス

はるかにくす

学校法人大阪工大摂南大学図書館

〒535 大阪市旭区大宮5-16-1

06-952-3131

新入生諸君に一本があなたを待っている

図書館長 玉城 逸夫

大学生になった。大きな教室で、人が一杯に座っている。みんな自分より秀才に見える。むずかしそうな研究室の名前が廊下に並んでいる。いまに、あんな研究室に入って卒業研究をやるのだ。そう、いまあなたは、4分のバラ色と6分の不安で緊張している。

合格したら、あれもこれもしよう。でも、大学に入ったら、あの本を読もうと想っていた人は少ないでしょうね。教科書を眺めるほかは、スポーツ紙とJumpしか読まないという学生君もいるのですから。ま、いろいろしたいことはあるでしょうが、そのなかに本を読む楽しみも加えてみませんか。SFでも文芸作品でも、さては免許の取り方でも好みの本をちょっと読んでみましょう。

おもしろかったでしょう？ おもしろいということは、自分の人生に新しい夢がふくらんだことだと思います。本が小石になって、心の水面に波紋を広げたように、きみの人生に創造と可能性の輪が広がったと思いませんか。もう一つ言えば、本は著者の手づくり。だからたとえば、石山寺の一室で一字一字書いた本（源氏物語）を、980年後 time slipして、いま読める、紫式部サンに会えるということは、素晴らしいことだと思いませんか。

さて本を読むとして、読みたい本が本屋さんには、買うにはちょっとお小遣いがとい

ったとき、図書館が登場します。高校の「図書室」と違って、中央図書館です。万卷の書が、あなたを待っています。無限の夢です。とにかく「図書館を探険」してみませんか？

手続きなしで取り出して読める本（雑誌・新聞）にはなにがあるか、読みたい本を捜す（検索）方法、借り出す方法はどのようにするのか。一度トライして、一二冊の本を借りそして返してみてください。そう、簡単です。これであなたと図書館と first kiss はおわりました。

こころが渴いたら…なんてオシャレなことは言わず、毎日、新聞を読みにくる学生もいるし、冷房つきの勉強部屋にしている人もいます。ぜひ4月中に図書館と最初のお付き合いを始めてください。図書館がいつも存在する、あなたの豊かな生活のスタートのために。

追伸 いまどんな本がいいかって？ 強いて1冊をお薦めするなら、竹内均さんの学問への憧憬。このシリーズには、森本哲郎：学問への旅、福井謙一：学問の創造等などがあります。漱石の「三四郎」を原点とする、大学生活を描いた多くの小説は、現在のあなたにとって、興味ある読み物でしょう。



「TLIS」きのう・今日・あす

1. はじめに

「トリス」と読みます。どこかで聞いたような名称ですが、大阪工業大学中央図書館のシステム名です。たまたま、システム開発に携わった図書館員達が酒好きであったところから命名された、というまことしやかな話もありますが、ここでいう「トリス」とは、「Total Library Information System (図書館総合情報管理システム)の略称で、必ずしも館員が酒好きだったから付いたわけではありません。(もっとも酒はよく飲みますが……)

冗談はさておいて、このシステムが稼働して6年が経過しました。コンピュータの世界で6年というと技術革新の凄まじい今日、「昔むかし……」の話になってしまいます。先日もあるコンピュータ関係の雑誌に「日進月歩」ならぬ「秒進分歩」なる言葉に出会い、日本語の乱れと言いきってよいのかわかりませんが、この一見誇張した表現と思われる言葉の中に現実を見る思いがしました。今回の「ぱびろにくす」は、その「昔」を振り返り現在をちょっと通り過ぎたところまで、行ってみたいと思います。では、ご案内します。

2. TLIS・きのう

昭和57年4月、TLISが稼働しました。いきなり稼働した訳ではなく次のような経緯がありました。

昔むかし(昭和50年)、学園ではその当時としては新しいコンピュータを導入しました。(システム×××モデル○○○という表現は嫌いなのでやめますが)これを機会に「その余剰能力を図書館業務にも利用しよう」というのが、そもそもの始まりでした。図書館では検討を重ねた結果、比較的機械化が容易な「雑誌発注管理」業務を51年10月にスタートさせました。これを皮切りに翌52年4月、マークカード方式(今は懐かしいあの塗り潰し方式)による「雑誌受入管理システム」の開発、55年7月には「全蔵書の棚卸処理」、56年2月には「単行本発注・受入処理」等々、個別のバッチ処理(一つ一つの業務を一括処理

する)システムを開発・運用し、効果を上げてきました。

しかし、このような個別のバッチ処理システムでは、将来にわたって運用していくことが出来ず、また、データそのものも目的に合わせて、その都度入力しなければならないという、非常に効率の悪い結果となってしまいます。そのうえ、システム全体としてはバラバラなものですから、これらを一つのまとまりのあるシステムにしなければならないという問題が生じてきました。この問題を解決するためにも、新たに総合的な図書館システムをオンラインで実現する必要性に迫られ、56年4月、図書館内に「次期システム建設のための研究会」が設置されました。この年、つまり昭和56年ですが、学園に新しいコンピュータが導入され、同時に「学内業務機械化検討委員会」という油まみれになりそうな名前の委員会が設置されました。この委員会の最優先課題として昭和56年8月、「TLIS(図書館総合情報管理システム)」の開発着手が決定されました。ここに至って、従来のバッチ処理からオンライン処理に、移行するための動きが活発になり、TLISの稼働は57年4月と決定されました。最初に手掛けたことは業務分析でした。

昭和56年9月、各係員の業務内容を分析・検討し、機械化に向けた処理手順の見直し作業に入りました。同時に筑波大学を始め、国立民族学博物館等の調査・研究、システム見学を行いました。これら先達の機関の貴重な経験に基づく、暖かいアドバイスは神々の声とも思えるほど有難いものでした。当時はまだ、図書館業務を機械化(電算化)している所は非常に少なく、すべて手探り状態の中での作業だったのです。10月に入るとシステム的设计に着手し、翌11月にはプログラミングおよびデータの入力が開始されました。タイムリミットの4月が近づくにつれ、館員の疲労は倍加していきました。特に、メーカーのシステムエンジニア1名に、中央研究所職員1

名の計2名がついたとはいえ、プログラミングを始めとするシステム開発を、ほぼ一人でやり切った担当者の苦勞と負担は心身共に大変なものでした。こうした作業を終えた翌57年2月、システムテストの実施まで漕ぎ着きました。約1ヵ月余りのテストの結果、4月実施にメドがついたと思った矢先、検索システムの条件設定で問題が発見されました。具体的な事例は記憶に残っていませんが、特定のケースで複数の条件を設定するとうまくヒットしないというような事だったのでしょうか。現実に目の前にある本が検索のケースによって「所蔵していません」と表示されたのでは利用者はたまりません。プログラムの総点検です。タイムリミットの4月を迎える直前まで手こずった挙げ句、ようやくこの問題を解決して4月開講と同時にT L I S稼動が実現しました。もっともこの時点では、解決とは言え入力データと完全一致での条件設定ということであって、どのような入力形態でもヒットする訳ではありませんでした。この問題は次の「T L I S・今日」であらためて触れることにします。ともあれ、図書館で行う全業務を処理することが可能な一つのまとまりあるシステムがここに実現したわけです。

その後、実際の運用の中で各種の改善・機能拡張等が行なわれてきました。その結果、このT L I Sは図書館員が自らつくったという点で個々の係員にとっても使い勝手のよい操作性に優れたシステムとなりました。

3. T L I S・今日

すっかり端末操作にも慣れ、キーボード・アレルギーもなくなりました。しかし今度は端末がなければ仕事ができず、端末の奪い合いや割り込みが日常化し、仕事の段取りに工夫が必要となってきました。因に現在の臨時要員を含む館員数(実端末使用者数)と設置端末台数はそれぞれ15名に対して8台(利用者に開放している検索用端末2台を除く)となっています。このことに加えて、事務と教育の併用で使用されているホストコンピュータの応答速度が遅いと、検索利用者から苦情が出ると同時に、図書館業務にも支障が出る始末となり、また、最近では機能拡張も思うように出来ないのが現状です。特に先ほど述べました検索については、先生方からも多様

な検索方法を可能にした、検索システムへの機能拡張が求められているのが実情です。便利なものも使い慣れてしまうとそれが普通になり、もっと便利なものを要求するのは当然のことと思います。私達もそれを否定するものではありません。特に他大学図書館で当館にない検索機能を見聞した時など、自館検索システムの機能拡張の必要性を痛感します。

また、先の学術情報センターとの接続(昭和61年10月)、および同センターが研究者を主な対象として行っている、情報検索サービス(N A C S I S - I R)への登録(昭和63年2月)等により、中央図書館を取り巻く環境も大きく変化してきました。このような中で今、当館が抱えている大きな問題は、学術情報センターと双方向でのデータの受渡しを可能にするため、データベースをつくりかえる(再構築する)ことです。これは、簡単な例で言えば大阪の「環状線」(中央図書館のローカルシステム)に東京からの「新幹線」(学術情報センターのシステム)を相互乗り入れさせるようなもので、このため「環状線」の設備(データベース)をつくりかえなければならぬということなのです。

さて、現在のT L I Sは多くの課題を抱えています。今までに達成してきた成果も同時に沢山持っています。利用者の目に触れないところでの努力は、貸出冊数の増加や購入希望図書的大幅な申込み等、統計によっても知ることができます。そして、ここまで中央図書館を育て上げてきたのが、他ならぬ教職員・学生の皆さんであることをよく知っています。

4. T L I S・あす

「きのう・今日・あす」は間断なく続きます。当然、T L I Sも図書館も全てが変わっていかねばなりません。従来の図書館員の持つイメージは、どちらかと言うと図書の番人的な面が強かったようです。そして、図書館自体が社会の中でも地味で目立たない、主役というよりは脇役的存在でした。しかし、先端技術がしのぎを削る今日、図書館の果たす役割は脇役から主役へと変わってきました。情報が価値を産む時代に、図書館に求められるものは、正に、ハイテクノロジーを駆使した情報を扱う専門家集団です。情報化社会の

到来によって、図書館が社会のリーダーとして邁進していく時が来ました。

そこで、中央図書館ではそういった時代の要請に応じていくため、T L I Sのバージョン・アップのための環境整備を行っていくと共に、必要な準備作業を着々と進めています。また、図書資料の多様化に伴い、時代に即応した資料の収集を行うなどあらゆる面で検討

を、加えています。この先に、見えてくるものが、いわゆる「電子図書館」というものになるかと思いますが、可能な限り新しい技術を導入していくと共に、それらを駆使できる能力を養っていきたいと考えています。そして、利用者と図書館員の関係が今よりも一層強いものになることを望んでいます。

～システム開発担当者からの一言～

中央研究所システム開発室係長 杉町 宏

T L I Sは道具です。本来、図書館の機能は、利用者の皆さんと館員の方々の知的関係において発揮されます。即ち、「利用者が自身の求める情報を能動的に要求し、また館員がそれを充分理解し、的確な判断のもとに最適の資料(情報)を提供するという一連の行為によって図書館の使命が果たせられるわけです。コンピュータシステムとは、その知的生産のための、数ある中の一つの道具であるといえるでしょう。従って、システムそのものが図書館の機能を発揮するのではなく、システムを道具として有効に活用する利用者や館員によってその機能が発揮されるのです。

「ハサミは使いよう」とはいうものの、やはり切れ味の悪くなったハサミは厄介なものです。そこで、砥石で研いでみたり、新しいハサミを買うことになるわけです。道具とはこのように生産効率が低下した時には、それを、修理・整備したり、場合によっては新しいものに交換する必要があるでしょう。システムは道具ですから全く同じことがいえま

す。このことを念頭に、これまで、T L I Sをより使いやすくするために、多くの努力を重ねてきました。

しかし、限られたコンピュータ資源(ハード、ソフト)の中で、全ての要求を満足させることは困難です。中央研究所設置のコンピュータは図書館システム以外に、研究・教育・事務の多くの利用に供しています。近年、その利用が、急激に増加し、不便をおかけするケースも増えています。従って、中央研究所ではシステムの改良と合わせてコンピュータ資源の充実にもできる限り努力していく方針です。

学術情報流通の急速な変化に対応して、学外システムとの連携機能を強化し、特に利用面の機能拡張を行い、さらに有効な道具として調和のとれたシステムにしたいと考えています。「必要は発明の母」と申しますが、また必要は道具の機能を高めるでしょう。皆さんのアイデア、ご要望をお待ちしております。

編集後記

※新館長に工大・一般教育科 玉城逸夫教授(理学博士 地球物理学)をお迎えすることになりました。よろしくお願ひします。

※新入生の皆さん入学おめでとうございます君たちの学生生活の中に、図書館をお忘れなく。

※今なぜ、図書館システムなのか。大学図書

館をとりまく環境は今、大きく変化しつつあります。この変化に即応するために、T L I Sの見直しが必要なのです。

※さあ、春は桜。花見で一杯もよし、淀川の堤防で、ゴロ寝もよし。ポカポカ陽気なら最高!

お断わり

「淀川ぶらり散策」「図書館活用の手引」はお休みしました。